

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21792293

研究課題名（和文） 定年退職後の高齢男性ボランティアの活動に関する記述的研究

研究課題名（英文） Descriptive study of activity of the elderly men volunteers after mandatory retirement

研究代表者

齋藤 美華（SAITO MIKA）

東北大学・大学院医学系研究科・講師

研究者番号：20305345

研究成果の概要（和文）：

定年退職後に地域を基盤としたボランティア活動に参加している高齢男性に焦点をあて、彼らは、どのようなきっかけでボランティア活動に参加し、どのように活動しているのか、その意味を探求することを目的に質的記述的研究を実施した。その結果、高齢男性のボランティア活動への参加のきっかけとして、【退職を契機とした自己の課題の明確化】と【参加行動を促す外的要因】の2つのカテゴリが抽出された。また、ボランティア活動への継続参加の要因として、【地域の課題を認識する】【地域を守ることへの責任感】【地域に役立つ自分への達成感が得られる】【男性の居場所がある】【家族の理解がある】の5つのカテゴリが抽出された。

研究成果の概要（英文）：

We performed a qualitative descriptive study to assess opportunities for participation of elderly men in volunteer activity, clarifying problems of the self that assumed resignation an opportunity. Two categories of external factors promoting participation behavior were extracted. Five categories related to family understanding were extracted as factors affecting continuation of participation in volunteer activity [sense of accomplishment to oneself helping the area is obtained] [with the place to stay of men] [we recognize a local problem] [a sense of responsibility to following an area]. We specifically examined elderly men who participated in volunteer activities that assumed an area a base after mandatory retirement, assessing their volunteer activities, and how they were active in their participation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	0	0	0
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野： 医歯薬学

科研費の分科・細目： 看護学・地域・老年看護学

キーワード： 高齢男性、ボランティア、定年退職

1. 研究開始当初の背景

少子高齢化が急速に進行しているわが国においては、元気な高齢者が支援を必要とする高齢者を支えるということへの支援体制の検討が課題となっている。また、ボランティア活動をはじめとする高齢者の社会参加活動は、高齢者が年齢にとわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍できる場として推奨されているとともに、高齢者ボランティアの活用は地域の担い手としてだけでなく地域の活性化を図る上でも期待されている。なかでも、団塊の世代とよばれる人たちを活用した住民ボランティア活動に期待が寄せられている。

地域を基盤としたボランティアは、女性が圧倒的に多いのが現状である。また、高齢男性は女性に比べて地域を基盤とした保健事業に参加しない傾向があること、地域でのグループ活動に関心が薄いことなどが指摘されてきてきた。しかし一方で、多くの高齢者が社会参加あるいは地域社会への担い手として参加したいという意欲を持っているにも関わらず、現実にはなかなか参加できない状態であることが報告されている。勤労者であった高齢男性は、地域との結びつきが薄いことが特徴としてあるため、地域活動への参加の一步を踏み出すための支援の重要性が述べられている。さらに、高齢者にとってボランティア活動は、職業生活からの引退により喪失した役割を補填しうること、地域の介護予防事業における高齢者のボランティア活動への参加は、ボランティア自身の介護予防にも結びつくことが示されている。これらのことから、地域を基盤としたボランティア活動に定年退職をした高齢男性が参加することは意義があり、彼らに対して地域ボランティア活動への参加の一步を踏み出すための支援を行うことが重要であるといえる。

わが国における高齢者ボランティアに関する研究は緒についたばかりである。また、国内外の研究においても、その内容は、ボランティア活動への参加が高齢者の心身の健康に及ぼす効果について検証したものが中心であり、ボランティア活動への高齢者の認識を捉えたものは見当たらない現状にある。

一方、筆者が行った農村地域において主体的に介護予防事業を運営している前期高齢女性に焦点をあてた研究において、前期高齢女性にとって介護予防事業を運営するとは、

『後期高齢者が自分らしく生きていくために自らの経験を発揮すること』であり、これまでの住民ボランティア活動の認識に関する研究や都市部における住民ボランティア活動の認識に関する研究と異なる新たな知見を見出した。つまり、他者である後期高齢者が自分らしく生きていくことで前期高齢女性もまた自らの老いを価値づけ、自分らしく生きていくことができるといった前期高齢女性と後期高齢者の相互作用の構造が明確になり、セルフ・ヘルプグループとしての機能を有していることが示された。また、主体的な運営が行われるには、運営する者が後期高齢者の価値観や境遇、地域文化を共有できることが大切であり、同じ地区で長年生活している前期高齢者が介護予防事業を運営することに意義があり、またソーシャル・キャピタル (Social Capital) の豊かさの重要性が明確になった。これらのことから、元気な高齢者が支援を必要とする高齢者を支えるということへの支援体制を確立する上では、高齢女性だけでなく、地域との結びつきが薄いといわれる定年退職後の多くの高齢男性についてもボランティアとしての導入の可能性を検討することが必要であると考えた。また、ボランティア活動の量的な至適水準は、労働価値観や生きがい観といった民族・文化的背景の影響を受けることが指摘されていることから、定年退職後に地域を基盤としたボランティア活動に参加している高齢男性がどのようなきっかけでボランティア活動に参加し、どのように活動しているのか、また彼らにとってボランティア活動とはどのようなものなのかについて、彼らの視点からボランティア活動に関わるものの見方、考え方、生活の仕方からその意味を理解することは、地域との結びつきが薄い勤労者であった高齢男性のボランティア活動参加への効果的な支援のあり方を示唆するものと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、これまで明らかにされてこなかった定年退職後に地域を基盤としたボランティア活動に参加している高齢男性という文化的集団に焦点をあて、彼らは、どのようなきっかけでボランティア活動に参加し、どのように活動しているのか、また、彼らにとってボランティア活動とはどのようなものなのか、その意味を探求することを目的とし

た。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

本研究は、方法論としてエスノグラフィーを用いる。エスノグラフィーの目的は文化の記述であり、ある集団に属する人々の経験に基づいたデータを用いて、その人たちの文化と結びついた理論を形成し、人間の行動を理解することができる。Spradleyによれば文化とは、経験を解釈して行動を生み出すために、特定集団の人々が伝承し、身につけている知識であると定義している。エスノグラフィーは人々の生活の中で生じる経験に関するデータから、ある特定集団の文化を帰納的に明らかにしようとするものである。したがって、調査は対象者の行動が行われている場に身を置いて、対象者との相互作用の中から参加観察、インタビュー、対象者の人々が作り出し用いている記録物など多様なデータ収集方法を用いて人々の生活を丸ごと調査するところに特徴がある。そのため、この研究方法を用いることにより定年退職後に地域を基盤としたボランティア活動に参加している高齢男性という独自の文化の理解が可能であると考えた。

(2) 調査地の概要

A町は、政令指定都市に隣接し、その63.3%を山林が占めている。人口は年々増加し、平成21年3月末日現在24,684人であり、高齢化率は20.3%である。元来、農業を基盤とした地域であったが、近年の農業の衰退および宅地造成により、ベッドタウンとして新しい住宅も立ち並んでいる。

(3) 研究参加者

研究参加者は、A県B町において定年退職後に地域を基盤としたボランティア活動（健康づくり事業および介護予防事業におけるボランティア、子育て教室やおもちゃ病院のボランティアなど）に参加している高齢男性10人と、高齢男性と共に活動に携わるボランティアスタッフ、事務局職員、担当保健師の計7人である。

(4) データ収集方法

データ収集および分析は、Spradleyの方法に基づいて行った。

データ収集は、研究参加者の了解を得た上で、健康づくり事業や介護予防事業、子育て教室やおもちゃ病院での活動場面および打ち合わせや反省会の場面に参加させてもらい、高齢男性の活動の様子や対象者やスタッフの関わりの様子などを観察し記述するとともに必要時、グループインタビューおよびインフォーマル・インタビューを行った。ま

た、高齢男性に対し、ボランティア活動をはじめたきっかけと活動に関わった感想や意見などについて、その他の研究参加者には、ボランティア活動での高齢男性の活動ぶりについて、自由に語ってもらいインタビューを個別に行った。インタビューは、活動終了後の会場や研究参加者の自宅または職場において個別に1~2回実施し、参加者本人の了解を得て、録音や書き留めをし、事後に逐語録化した。さらに、役場や研修センター、分化ホールなど町の主要施設を訪問し、地域の特性を把握するとともに、町の人口統計資料、広報、活動のまとめなどの既存資料から必要事項を採取し、フィールドノートとして書き出した。

(5) 分析方法

分析は、データ収集と同時進行で行った。参加観察およびインタビュー、書類・資料等によるデータをコード化し、文脈の意味を考慮しながら同じ意味内容のもの同士を集めてカテゴリを組んでいった。

(6) 倫理的配慮

高齢男性には、事前に町保健師から研究者の紹介を依頼し、紹介された後、すべての研究参加者に対し、文書と口頭で研究の主旨を伝え、倫理的配慮などについて説明し、同意を得た上で実施した。フォーマル・インタビュー時も再度、同意を確認し、研究の対象者から了解を得た上でテープへの録音を行い、プライバシーの保護に留意した。

なお、本研究は、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の審査・承認を得て実施した。

4. 研究成果

定年退職後に地域を基盤としたボランティア活動に参加している高齢男性のボランティア活動への参加のきっかけとして、【退職を契機とした自己の課題の明確化】と【参加行動を促す外的要因】の2つのカテゴリが抽出され、それぞれの下位には、＜仕事だけの自分を再認識する＞＜地域とのつながりがなくないことへの気づき＞＜地域の一員としての自己の希求＞と＜地域の役割を付与される＞が抽出された。また、ボランティア活動への継続参加の要因として、【地域の課題を認識する】【地域を守ることへの責任感】【地域に役立つ自分への達成感が得られる】【男性の居場所がある】【家族の理解がある】の5つのカテゴリが抽出された。

本研究課題から得られた結果として、定年退職後の高齢男性は、地域を基盤とした介護予防事業およびボランティア活動のいずれにおいても参加のきっかけとして「地域とのつながりの希求」「地域の友人や保健師から

の直接的な誘い」が重要な要素として抽出された。つまり、定年退職後の高齢男性が地域を基盤とした活動に参加するためには、高齢男性自身が地域とのつながりを希求し、直接的に地域とのつながりから誘われることが必要であることを示している。このことは、地域とのつながりの薄い定年退職後の高齢男性であっても、定年前から地域とのつながりをもっていることが、地域への一歩を踏み出すための鍵になるといえる。仕事中心の男性が仕事を引退していきなり地域での活動に参加することは困難であることから高齢期の世代だけでなく、それより若い世代に対しても地域活動への参加を支援することが重要であり、高齢男性が定年退職後に早期に地域活動に参加していけるよう支援することが必要である。そのためには、準備段階として定年前の向老期世代に対しての地域とのつながりを支援していくことが重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 美華 (SAITO MIKA)

東北大学・大学院医学系研究科・講師

研究者番号：20305345

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：